

Atsuhiko Kato

## 5 Entailed and intended results in Japanese and Burmese

**accomplishment verbs** (日本語とビルマ語における含意された結果と意図された結果)

### 1. 序論

Vendler (1967)は、英語の動詞が表す意味を、その時間的な性質に基づいて activities, accomplishments, achievements, states の4つに分類した。この分類は様々な言語に応用できるが、注意すべきことは、異なる言語においては似た意味の動詞が異なるカテゴリーに属することがあるということである。例えば、英語の know は state verb であるが、語彙的にそれに対応するとされる日本語の *shiru* は ‘get to know’ という意味の achievement verb であり、現在の状態を表すためには変化の結果を表す *-te iru* を付けなければならない。同様に、同じカテゴリーに属すると見なせる動詞の意味が、異なる言語において、違った振る舞いを示すことがある。例えば、accomplishment verb である英語の kill は、(1)のように使うことはできない。

(1) \*I killed him, but he didn't die.

kill は、動作主(agent)の使役動作によって対象物(patient)に「死ぬ」という事象が発生することを含意(entail)するから、(1)の前半で「殺す」という動作を肯定しているのに、後半で「死ぬ」という結果を否定するのは、論理的に矛盾する。ところが、Tai (1984)によれば、次の中国語文は意味的な矛盾を生じない(表記は Tai に従う)。

(2) *Zhangsan sha-le Lisi liangci, Lisi dou mei si.*

Lit. ‘Zhangsan killed Lisi twice, but he didn't die.’

Tai (1984)の議論によると、中国語の動詞 *shā* ‘kill’ は、結果としての「死ぬこと」を含意(entail)しないから、(2)は矛盾を生じない。英語の kill と中国語の *shā* の対比に見られるように、異なる言語間で語彙的に対応すると思われる動詞であっても、意味的・統語的振る舞いが異なることがある。Tai (1984)は、(2)のような

例に基づき、中国語には accomplishment verbs がないと主張するが、Liu (2006: 14-17)は、中国語にも accomplishment verbs は存在すると論じている。本章では、中国語の *shā* ‘kill’は accomplishment verb であると仮定して議論を進める。

ビルマ語にも中国語と同様の現象が観察される。

- (3)      *tù mahlá=gò    t̃aʔ=tè.      dà=bèmé    mahlá    mǎ-tè=bú.*  
3sg PN=KO    kill=REAL    this=though PN    NEG-die=NEG  
‘He killed Ma Hla. But Ma Hla didn’t die.’

(3)は、「彼は Ma Hla を殺した」を意味する前半の clause と、「Ma Hla は死ななかつた」を意味する後半の clause で構成され、同一話者による one sentence である。(3)のビルマ語例は統語的には(1)の英語と似ているが、意味的には、(2)の中国語と同様に論理的な矛盾を生じない。

さて、日本語の研究では、中国語やビルマ語ほどではないが、類似した現象が起こることが指摘されてきた。とりわけ、Ikegami (1981: 249-283)は、(1)のような表現を許さない英語が到達点指向性の強い「スル」型言語であるのに対して、日本語は到達点指向性の弱い「ナル」型の言語であり、この特徴のため、(4)のような文が意味的な矛盾なしに成立すると主張する。

- (4)      *Moyasi-ta    keredo,    moe-nakat-ta.*  
burn(vt)-PST    although    burn(vi)-NEG-PST  
‘(I) burned (it), but (it) didn’t burn.’

(4)は、同一の話者による one sentence の発話で、first clause で「燃やす」という使役他動詞を用いながら、second clause では自動詞「燃える」の否定形を用いている。後で議論するように、この文が意図するのは、「私は対象物に火をつけたけれど、その対象物は十分には（意図した程度には）燃えなかつた」という状況である。言い換えると、対象物に対する行為を行い、その結果として、対象物に変化したけれども意図した状態には到達しなかつた、ということである。この現象を、Tsuji-mura (2003)は“event cancellation”と呼んでいるが、点火するという event は成立しているので、この用語は misleading である。むしろ、“result cancellation”あるいは“result suspension”と呼ぶほうが better だろう。ただし、この現象は、Ikegami (1981)が想定したほど自由に起こるものではない。宮島

(1985)が指摘したように、この現象は用いられる動詞や文脈によって、あるいは話者によって容認度がかなり変動する。

以上を総合すると、**accomplishment verb** の「結果到達の打ち消し(取り消し)」という現象に関して、日本語は英語と中国語・ビルマ語の中間に位置するよう見える。本章の目的は、ビルマ語と比較することにより、日本語における当該現象の本質を明らかにすることである。以下では、まず、第2節でビルマ語の一般的な特徴を概説した後、ビルマ語の **accomplishment verb** における結果到達の打ち消しについて述べる。次に第3節で日本語についての主な先行研究をレビューし、第4節では、日本語の当該現象を可能にする要因を詳しく検討する。第5節では、ビルマ語の **accomplishment verb** における結果が **intended result** であることを述べ、最後に第6節で、東アジア、東南アジア、南アジアの諸言語の類似現象について研究の方向性を示唆する。

## 2. ビルマ語の **accomplishment verbs** における結果到達の打ち消し

ビルマ語で **accomplishment verbs** の結果到達を否定することが可能であることを述べた先行研究は、筆者の知る限りでは Thin Aye Aye Ko (2002)と Kato (2015)だけである。Thin Aye Aye Ko (2002)はビルマ語のこの現象について初めて言及したが、現象の存在を指摘するだけにとどまった。Kato (2015)は、ビルマ語の様々な動詞について結果への到達を打ち消すことができるかどうかを検証し、ビルマ語の意志動詞の使用においては、事象の終端(**end point**)への到達が **entail** されないと論じた。Kato (2015)は、「立った。しかし立てなかった」のように動作そのものの発生が否定される現象も扱っているが、本章では、日本語との比較のため、**accomplishment verbs** を含む文だけを扱うことにする。

ビルマ語は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属する、**analytic** な **SOV** 型言語である。文末の動詞の後ろには Okell (1969)が **verb-sentence marker** と呼ぶ助詞(**particle**)が義務的に付けられ、**realis** や **irrealis** を含む **modality** を表す。名詞の **semantic/grammatical role** も、名詞に後続する様々な **particle** で表される。(6)と(7)に示すように、自動詞と他動詞の主語には **particle =kâ/=gâ** が、目的語には **particle =kò/=gò** が後置される<sup>1</sup>。この点でビルマ語は対格型言語であると言える。主語と目的語に後置される **particle** は必須要素ではないので、括弧でくくつてある。

(5)      *ɲà(=gâ)*              *thàin=dê*.  
           1sg=KA              sit.down=REAL  
           ‘I sat down.’

(6)      *ɲà(=gâ)*      *ʔédi*    *ṭǎyεʔí(=gò)*      *sá=dê*.  
           1sg=KA      that    mango=KO      eat=REAL  
           ‘I ate that mango.’

ビルマ語の動詞分類において重要な意味要素は、意志性である。ビルマ語のすべての動詞は、意志性(volitionality)に基づいて、意志動詞(volitional verb)と無意志動詞(non-volitional verb)に分けることができる(Kato 2010, 2015)。意志動詞は意志(volition)を伴う事象を表し、無意志動詞は意志を伴わない事象を表す。これは、ビルマ語動詞において基本的な区別である。例えば、*mé* ‘forget’は無意志動詞であるため、*mé=dê* (forget=REAL) ‘(I) forgot (it)’という文は、無意識に忘れたことを常に表し、「わざと忘れた」(‘forgot on purpose’)という状況を表すことができない。もし意志的に忘れたという状況を表したければ、意図(intention)を表す助動詞の *=laiʔ* を用いて、*mé=laiʔ=tê* のように言う必要がある。逆に、意志動詞 *kàin* ‘touch, hold’ を用いた *kàin=dê* (touch=REAL) ‘(I) touched (it)’ という文は、意志的に触ったという状況しか表すことができない。もし無意識のうちに触ってしまったことを表したければ、非意図性(inadvertency)を表す助動詞の *=mí* を用いて、*kàin=mí=dê* と表現する必要がある。

Tsujimura (2003)によれば、日本語において accomplishment verbs が持つはずの結果の意味が打ち消される現象が典型的に観察されるのは、(4)に例示した *moyasu – moeru* のように他動詞と自動詞が形態的な対応を有するペアの transitive variant に対してである。このような他動詞と自動詞の pairs は、*oru – oreru*, *kiru – kireru*, *yaku – yakeru*, *otosu – ochiru*, *tomeru – tomaru*, *kesu – kieru*, *kowasu – kowareru*, *nagasu – nagareru*, *ireru – hairu* など豊富に見られる(Hayatsu 1989; Kageyama and Jacobsen [eds. 2017])。Cornyn and McDavid (1943)と Okell (1969: 205-208)が示したように、ビルマ語にも形態的に関係のある他動詞と自動詞の対が相当数ある。Cornyn and McDavid は 70 対以上の例を示している。ビルマ語の場合、*chauʔ* ‘frighten’ と *cauʔ* ‘fear’ のようにどちらも他動詞である場合があるので、他動詞対自動詞というよりは、causative 対 non-causative と呼ぶほうが正確である。代表的な例を Table 1 に挙げる。

Table 1: Morphological pairs of causative and non-causative verbs in Burmese

Causative (transitive)	Non-causative (intransitive)
<i>châ</i> ‘drop’	<i>câ</i> ‘drop’
<i>chau?</i> ‘frighten’	<i>cau?</i> ‘fear, to be afraid’
<i>che?</i> ‘cook’	<i>ce?</i> ‘get cooked’
<i>chó</i> ‘bend, break (as a stick)’	<i>có</i> ‘get bent’
<i>hlé</i> ‘knock down’	<i>lé</i> ‘fall down’
<i>hmyîn</i> ‘elevate’	<i>myîn</i> ‘high’
<i>hnó</i> ‘awaken’	<i>nó</i> ‘wake up’
<i>ka?</i> ‘attach, stick’	<i>ka?</i> ‘get attached’
<i>khau?</i> ‘fold’	<i>kau?</i> ‘get crooked’
<i>pei?</i> ‘close’	<i>pei?</i> ‘close’
<i>phwîn</i> ‘open’	<i>pwîn</i> ‘open’
<i>phye?</i> ‘break’	<i>pye?</i> ‘get broken’

Table 1 の例から分かるように、頭子音の有気：無気の対立(例えば/ch/ vs. /c/, /kh/ vs. /k/)あるいは無声：有聲の対立(例えば/hl/ vs. /l/, /hm/ vs. /m/)が、causative verb と non-causative verb の対応に関わっていることが多い。ただし、*ka?* ‘attach; be attached’ や *pei?* ‘close; close of itself’ のように、2つの動詞が同形の場合もある。また、*é* ‘burn’/ *làuN* ‘get burnt’, *ṭa?* ‘kill’/ *ṭè* ‘die’, *hlán* ‘dry’/ *chau?* ‘get dry’ のように、形態的に無関係であるが、意味的に対応する動詞対もある。いずれの場合も、これらの対における causative verb に共通する特徴は、みな意志動詞だということで、それらに対応する non-causative verbs はすべて無意志動詞である。

ビルマ語では、上に示したような causative verb と non-causative verb の対を用いて、(7)から(14)のような文を自由に作ることができる。これらの例では、causative verb を用いた first clause がそれぞれ特定の行為を意味し、non-causative verb を用いた second clause では、その causative verb が意味構造の中に含むはずの結果状態への到達を、同一話者が否定するという形になっている<sup>2</sup>。これは、*ka?* ‘attach, get attached’ のように causative verb と non-causative verb が同形である場合でも問題なく可能である。

- (7) *mí* *εô=dê*.      *dà=bêmê*      *mă-làun=bú*.  
 fire burn(vt)=REAL this=though NEG-burn(vi)=NEG  
 ‘(I) burnt (it), but (it) didn’t burn.’
- (8) *ṭú=gò*    *ṭaʔ=tê*.      *dà=bêmê*      *mă-ṭè=bú*.  
 3sg=KO kill=REAL this=though NEG-die=NEG  
 ‘(I) killed him, but (he) didn’t die.’
- (9) *châ=dê*.      *dà=bêmê*      *mă-câ=bú*.  
 drop(vt)=REAL this=though NEG-drop(vi)=NEG  
 ‘(I) dropped (the cup), but (it) didn’t drop.’
- (10) *chó=dê*.      *dà=bêmê*      *mă-có=bú*.  
 bend(vt)=REAL this=though NEG-bend(vi)=NEG  
 ‘(I) bent (a stick), but (it) didn’t bend.’
- (11) *hlé=dê*.      *dà=bêmê*      *mă-lé=bú*.  
 knock.down=REAL this=though NEG-fall.down=NEG  
 ‘(I) knocked down (the tree), but (it) didn’t fall down.’
- (12) *phwîN=dê*.      *dà=bêmê*      *mă-pwîN=bú*.  
 open(vt)=REAL this=though NEG-open(vi)=NEG  
 ‘(I) opened (the window), but (it) didn’t open.’
- (13) *phyεʔ=tê*.      *dà=bêmê*      *mă-pyεʔ=phú*.  
 destroy=REAL this=though NEG-break(vi)=NEG  
 ‘(I) destroyed (the machine), but (it) didn’t get destroyed.’
- (14) *kaʔ=tê*.      *dà=bêmê*      *mă-kaʔ=phú*.  
 attach=REAL this=though NEG-attached=NEG  
 ‘(I) attached (the sticker), but (it) didn’t get attached.’

ビルマ語において注目すべきは、このような結果状態への到達を否定する言

い方は、いかなる話者でも例外なく容認するということである。これに対して、後述のように日本語では当該現象は話者によっても動詞によっても許容度が変わる。その点で、ビルマ語と日本語は大きく異なる。

### 3. 日本語における結果到達の打ち消し

日本語において accomplishment verbs の結果状態への到達を打ち消すことが容認される現象は、Ikegami (1981, 1985)によって指摘され、他にも、Miyajima (1985), Kageyama (1996), Alam Sasaki (2001)<sup>3</sup>, Tsujimura (2003), Sato (2005), Ezure (2006), Aoki and Nakatani (2013a, b)などによって論じられてきた。

Ikegami (1981: 266)は日本語の例として、上掲(4)の「燃やす-燃える」のほか、「沸かす-沸く」、「浮かべる-浮かぶ」などを挙げている。

(15) *Wakasi-ta keredo, wak-anakat-ta.*  
boil(vt)-PST although boil(vi)-NEG-PST  
'(I) boiled (it), but (it) didn't boil.'

(16) *Hune o ukabe-ta keredo, ukab-anakat-ta.*  
boat ACC float(vt)-PST although float(vi)-NEG-PST  
'(I) floated the boat, but (it) didn't float.'

Ikegami (1981: 266)が指摘するように、これら日本語文に対応する英語文は容認されない。

- (17) a. \*I burned it, but it didn't burn.  
b. \*I boiled it, but it didn't boil.  
c. \*I floated the boat, but it didn't float.

さらに Ikegami (1981: 267)は、日本語でも結果の発生を打ち消すことができない例として「殺す」を挙げている。これに対応する英語も容認されないことは、冒頭の(1)を見た。

- (18) \**Kare o korosi-ta keredo, sin-anakat-ta.*  
 he ACC kill-PST although die-NEG-PST  
 Lit. ‘(I) killed him, but (he) didn’t die.’

Ikegami (1981)の観察によれば、日本語と英語を比べると、一般的に、日本語において結果到達の否定が容認される可能性が英語よりも高い。

日本語でこのような結果の否定が可能になる理由や条件については、様々な理論的分析が提示されている。主なものを下に紹介する。Kageyama (1996: 275-291)は、この現象を、語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure)を用いて説明している。「殺す」「燃やす」のような accomplishment verb は、語彙概念構造を用いると(19)のように表示できる。ここで、ACT ON は使役動作の部分に相当する。CAUSE は、その動作によって、右側の事象が生じることを表す。BECOME は対象に生じる変化を表し、BE AT は最終的な状態を表す。

- (19) ACTIVITY -----→ CHANGE -→ RESULT  
 [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]

そして Kageyama (1996)は(20)の図を示し、次のように論じる。英語では ACT ON すなわち動作の部分に視点が置かれる。一方、日本語では BECOME に視点が置かれ、さらに中国語では、BE AT に視点が置かれる。“●”は視点が置かれる場所を表す。

- (20) Viewpoints and language types (Kageyama 1996)
- [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]
- |          |   |              |
|----------|---|--------------|
| English  | ● | —————→       |
| Japanese | ← | —————●—————→ |
| Chinese  | ← | —————●       |

Kageyama (1996)によれば、英語で結果の否定が難しく、日本語で可能である理由は、視点の置かれ方の違いにある。英語のように動作に視点が置かれる言語においては、動作の側から結果まで見ることになるため、結果の否定が不可能になるという。一方、日本語では結果事象に視点を置くから、動作の側から結果を見ない。そのためにこの現象が可能になると主張する。また、中国語では、



日本語よりもさらに右側に視点があるため、日本語よりも結果の否定が容易であるという。

Tsujimura (2003)は、日本語の語彙的使役動詞(lexical causative verbs)は限界性(telicity)に関して未指定(underspecified)であり、限界的な解釈(telic interpretation)は会話の推意(conversational implicature)から生じると考える。彼女によれば、結果の生起(event realization)は推意であるため、結果の否定が可能なのである。

Sato (2005: 99–113)は、動作とその結果を意味構造に含む動詞が、メトニミーの作用によって動作のみを表したときに、この現象が可能になると考える。また、Ezure (2006)は、accomplishment の動作部分に「焦点化操作」(focusing operation)がかかることによってこの現象が可能になると考える。さらに、Aoki and Nakatani (2013a,b)は、日本語の語彙的使役動詞が限界性に関して未指定であるという Tsujimura (2003)の説を否定し、動詞の意味における「プロセス成分の強さ」(strength of the process component)が結果の否定の容認度を高めると主張している。

日本語においてこの現象が可能になる理由がいかなるものであるにせよ、留意しておかなければならないことがある。それは、accomplishment verb の結果否定の容認度が話者によって大きく異なるということである。この問題については次節で述べる。

## 4. 結果到達の否定を可能にする種々の要因

本節では、ビルマ語と日本語を比べることによって、日本語で accomplishment verb の結果が否定できる現象の本質を明らかにしたい。

### 4.1 結果否定を容認しない話者達

ビルマ語では、(7)から(14)に示したような結果否定が、何の問題もなく可能であるのに対して、日本語では結果否定を認めない話者も多い。Miyajima (1985)は、この現象について非常に重要な調査を行っている。Miyajima は、結果否定を含む 19 個の文を被調査者に示し、どのように感じるかを、「自然」、「やや不自然だがが使われる」、「まったく不自然」の 3 つの選択肢から選ばせた。Miyajima が調査に用いた例文から 2 例を下に引用する。

(21) *Kinoeda o moyasi-ta keredo, moe-nakat-ta.*  
 branch ACC burn(vt)-PST although burn(vi)-NEG-PST  
 ‘(I) burned a branch, but (it) didn’t burn.’

(22) *Taroo wa Ziroom korosi-ta keredo, Ziroom wa sin-anakat-ta.*  
 Taro TOP Jiro ACC kill-PST although Jiro TOP die-NEG-PST  
 ‘Taro killed Jiro, but Jiro didn’t die.’

Miyajima (1985)の調査によれば、彼の Group A の被調査者 100 人のうち、(21)は、「自然」が 30 人、「やや不自然だが使われる」が 48 人、「まったく不自然」が 22 人であった。一方、(22)は、「自然」が 7 人、「やや不自然だが使われる」が 18 人、「まったく不自然」が 75 人であった。つまり、Ikegami (1981)が容認されると見なした(4)に類似する(21)の文に対して、100 人中 70 人が多かれ少なかれ不自然さを感じ、逆に、容認されないとした(18)に類似する(22)の文を、100 人中 25 人が「使われる」と判断したということである。

すなわち、日本語において、この現象を容認するか否かは話者によって大きく異なるのである。しかも、どのような動詞を使った場合にも、「まったく不自然」と判断する話者が必ずいる。「まったく不自然」と判断した話者が最も多かったのが(22)の文である。最も少なかった下掲の(23)でさえ、「自然」が 65 人、「やや不自然だが使われる」が 24 人に対して、「まったく不自然」が 11 人もいた。

(23) *Suika o hiyasi-ta keredo, tumetaku nar-anakat-ta.*  
 watermelon ACC cool(vt)-PST although cool become-NEG-PST  
 ‘(I) cooled a watermelon, but (it) didn’t become cool.’

日本語のこの状況は、ビルマ語において、(7)から(14)がいかなる母語話者によっても容認される状況とは際だった対照をなす。したがって、日本語においては、この現象が適格か否かという二分法で考えるべきではない。個々の例の容認度が高いか低いかという捉え方でこの現象を扱わなければならない。

ビルマ語と日本語の容認度の違いの原因を知るためには、両言語の意味の違いを詳細に見る必要がある。

## 4.2 結果否定におけるビルマ語と日本語の意味の違い

まず、‘kill’を用いたビルマ語の(3)と日本語の(22)を比べてみよう。(3)は次のような状況を表すことができる：(A)「彼は、Ma Hla を殺そうと思って、Ma Hla をナイフで突き刺した。しかし、彼女は死ななかつた」。あるいは、次のように、動作が対象に到達しなかつた状況さえ表すことができるのである：(B)「彼は、Ma Hla を殺そうと思って、彼女をナイフで突き刺そうとした。しかし、突き出したナイフは届かなかつたので、彼女は死ななかつた」。

一方、日本語の(22)を「自然」と考える話者の多くは、一例として、次のような状況を考えているのだろう：(C)「太郎は次郎を殺そうと思って、次郎をナイフで突き刺した。次郎が動かなくなつたので、太郎は次郎が死んだと思った。しかし、次郎は奇跡的に命を取りとめた」。

ここでのビルマ語と日本語の違いは、明白である。ビルマ語の場合、動作者は Ma Hla が死んでいないことを知っている。しかし、日本語の場合には、動作者が対象の死を信じた場合に否定が可能になるのである。(22)を不自然だと考える人が多いのは、死んだと思える状態から生き返る状況が起こりにくいからだと思われる。ビルマ語の(3)も、(C)と同様の状況を表すことがある。しかし、重要なのは、(A)や(B)の状況を表すことができるということである。

次に、‘burn’を用いたビルマ語の(7)と日本語の(21)を比べてみよう。(7)は次のような状況を表すことができる：(D)「私は、木の枝を燃やそうとしてマッチに火をつけた。その火を木の枝に当てたが、木の枝は湿っていたためまったく燃えなかつた」あるいは、(E)「私は、木の枝を燃やそうとしてマッチに火をつけた。その火を木の枝に当てたが、風が吹いてきて火が消えてしまったため、木の枝は燃えなかつた」。

一方、日本語の(21)を「自然」と考える話者は例えば次のような状況を考えているのだろう：(F)「私は木の枝に火をつけた。木の枝は少し燃えた。しかし、風が吹いてきたので、火が消えてしまった。そのため、木の枝は全部は燃えなかつた」。

ここでもビルマ語と日本語の違いは明白である。ビルマ語の(7)が表す状況では、そもそも木の枝が着火していない。しかし、日本語の(21)は、木の枝が部分的には燃えたが全部は燃えなかつたというような状況を表すのである。そのような状況を思い浮かべた人は、(21)を自然と感ずるのだろう。「部分的に燃える」という事象と「全部燃える」という事象は異なる事象だから、後者を否定しても、前者を否定したことにはならないのである。ビルマ語の(7)が(F)の状況を表すこともあるが、(D)や(E)の状況を表すことができるということが重要である。

### 4.3 結果の不完全な生起

第4.2節では、ビルマ語では、achievement verbs の表す変化事象がまったく生じていない読みが可能なのに対して、日本語においては変化事象は発生しており、その変化の結果が不完全な形で生じていることを見た。これがビルマ語と日本語の大きな違いである。この違いに基づき、日本語についてもう少し詳しく見てみよう。

日本語の当該現象に関して示唆的なのは、Miyajima (1985)の調査である。Miyajima は、先に述べた被験者へのアンケートに基づき、動詞による結果否定の容認度を点数化した。彼は、「自然」を1点、「やや不自然だが使われる」に0.5点、「まったく不自然」に0点を与え、100点満点中の点数を出した。その結果は以下のとおりである。なお、Miyajima が挙げた動詞のうち、accomplishment verb であると考えられないものは省いた。

- (24) korosu ‘kill’ (17.0), otosu ‘drop’ (22.0), kowasu ‘break’ (24.0), nuku ‘pull out’ (26.5), akeru ‘open’ (31.5), wakasu ‘boil’ (34.5), hirogeru ‘widen’ (36.0), ireru ‘put in’ (45.3), ugokasu ‘move’ (46.0), yowameru ‘weaken’ (46.0), moyasu ‘burn’ (53.0), kawakasu ‘dry’ (56.5), hiyasu ‘cool’ (66.0)

(24)の結果を、許容度の度合いによって10点ごとに分けて整理すると、(25)のようになる。

(25)

10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-
<i>korosu</i> ‘kill’	<i>nuku</i> ‘pull out’, <i>kowasu</i> ‘break’, <i>otosu</i> ‘drop’	<i>hirogeru</i> ‘widen’, <i>wakasu</i> ‘boil’, <i>akeru</i> ‘open’	<i>yowameru</i> ‘weaken’, <i>ugokasu</i> ‘move’, <i>ireru</i> ‘put in’	<i>kawakasu</i> ‘dry’, <i>moyasu</i> ‘burn’	<i>hiyasu</i> ‘cool’

右端近辺にある *hiyasu* ‘to cool’, *kawakasu* ‘dry’, *moyasu* ‘burn’ などは、結果が段階的構造(scalar structure)を持つ(scalar structure については Hay, Kennedy and Levin 1999 ; Kennedy and McNally 1999, 2005 ; Tsujimura 2001 などを参照)。例

例えば, *hiyasu* ‘to cool’ を例にとって考えると, その意味構造に含まれる結果である ‘冷えた状態’ は, ‘very cool’ や ‘less cool’ など, 様々な段階を持つ。そのため, ‘冷えた状態’は時間的な幅を持つことができ, *gohunkan hiyasita* ‘(I) cooled (it) for five minutes’ と言うことができる。動詞 *kawakasu* ‘dry’ と *moyasu* ‘burn’ も同様である: *gohunkan kawakasita* ‘(I) dried (it) for five minutes’; *gohunkan moyasita* ‘(I) burned (it) for five minutes’.

一方, 左端近辺にある *korosu* ‘kill’, *otosu* ‘drop’, *kowasu* ‘break’, *nuku* ‘pull out’ などは, 結果が段階的構造を持たない。例えば ‘死んだ状態’ には ‘very dead’ や ‘less dead’ などの段階はない。この特徴のため, *korosu* の結果としての ‘死んだ状態’ は時間的な幅を持つことができず, \**gohunkan korosita* ‘(I) killed (him) for five minutes’ と言うことができない。動詞 *otosu* ‘drop’, *kowasu* ‘break’, *nuku* ‘pull out’ も同様である: \**gohunkan otosita* ‘(I) dropped (it) for five minutes’; \**gohunkan kowasita* ‘(I) broke (it) for five minutes’; \**gohunkan nuita* ‘(I) pulled (it) out for five minutes’.

動詞の表す結果が段階的構造を持つ場合, 実際に生じた結果のレベルが予期したレベルに達していないという状況を話者が想像しやすい。予期したレベルへの到達を「完全な生起」という言葉で表し, そのレベルに到達しないことを「不完全な生起」という言葉で表すと, 段階的構造の場合, 「完全な生起」が実現せず, 「不完全な生起」で終わったという状況を想像しやすいのである。一方, 事象が段階的構造を持たない場合, 結果は一つしかないので, 「完全な生起」と「不完全な生起」の二つを話者が想像することは困難である。結論として, 「不完全には X したが, 完全には X しなかった」という解釈が容易なときに結果の否定が容認されやすいということが言えるだろう。「完全に X する」は「不完全に X する」を imply しないから, 「完全に X する」を否定しても矛盾が生じない。結果の不完全な生起という読みが結果の否定の容認度に関わっているということは, 先行研究で指摘されてこなかった。

日本語話者の中には, (21)や(22)の文を聞いて, ビルマ語話者のように, 結果がまったく生じないという状況を思い浮かべる者がいるのも確かである。しかし, そのような話者が少数であることは, 宮島の行った調査において, 全般的に「自然」という答えが多くないことに現れている。以上は, 次のようにまとめられる。「不完全な生起」であっても結果は生起しているのであるから, 多くの日本語話者において, accomplishment verb は結果を含意(entail)するのである。

#### 4.4 副詞的要素による結果の defocusing

4.3 節で見たように、日本語では、「結果の不完全な生起」という解釈が結果否定の容認度を高める。しかし、日本語においても、ビルマ語と同じように、結果がまったく生じていない状況を表すことがある。それは、動作を修飾する副詞的要素(adverbial element)が現れた場合である。

Miyajima (1985)の調査結果によれば、副詞「一生懸命」を含む(27)は(26)よりも容認度が高い。(26)は、「自然」が11人、「やや不自然だが使われる」が22人、「まったく不自然」が66人であるが、(27)は、「自然」が31人、「やや不自然だが使われる」が36人、「まったく不自然」が33人であり、「自然」および「やや不自然だが使われる」の数が増えている。

(26) *Kakinomi o otosi-ta keredo, oti-nakat-ta.*  
persimmon ACC drop(vt)-PST although drop(vi)-NEG-PST  
'(I) dropped the persimmon, but (it) didn't drop.'

(27) *Issyookenmei kakinomi o otosi-ta keredo,*  
very.hard persimmon ACC drop(vt)-PST although  
*oti-nakat-ta.*  
drop(vi)-NEG-PST  
'(I) dropped the persimmon very hard, but (it) didn't drop.'

「落ちる」という事象が不完全に起きるということは考えにくいから、(27)の容認度がより高いことを、結果の不完全な生起の観点から説明するのは難しい。Miyajima (1985) は、副詞「一生懸命」により、動作に焦点が当たったことがその原因だと考える。私もこれが原因であると考えたい。「一生懸命」は意味的に動作の部分のみを修飾する副詞だから、動作に focus を当てる。そのため、結果の部分が defocus されるのだろう。結果の defocusing を引き起こす副詞的要素としては、「一生懸命」「こっそり」「おそるおそる」などのほか、「真剣に」「急いで」「力を込めて」なども候補になる。

しかしながら、Miyajima (1985)の調査で、(27)を「まったく不自然」と考えた被調査者が30%以上もいたという事実は無視できない。よって、「副詞的要素による結果の defocusing」は、結果否定の容認度を高める要因としては、「結果の不完全な生起」よりは弱い。また、副詞的要素という、動詞とは異なる要素の

出現が必要である。したがって、「副詞的要素による結果の defocusing」は副次的な要因であると考えられる。結果否定の容認度を高める主要な要因は「結果の不完全な生起」だと考えるべきである。

#### 4.5 先行研究の妥当性

4.3 と 4.4 の議論で、日本語の accomplishment verb における結果否定の容認度を高める要因として、(i)結果の不完全な生起という解釈、および、(ii)副詞的要素による結果の defocusing、の2つを認める必要があることを指摘した。このうち、(i)が主要な要因である。Ikegami (1981, 1985)が指摘している日本語と英語の違いは、日本語には結果の否定の容認度を高める(i)(ii)のような条件が存在するのに対し、英語には一切存在しないということに帰することができる。

ここで、日本語における結果否定を可能にする要因について述べた先行研究の妥当性を考えてみよう。Kageyama (1996)は、日本語では Lexical Conceptual Structure の BECOME に視点が置かれるので、ACT ON に視点が置かれる英語よりも、結果否定の許容度が高くなるとする。しかし、これだけでは、動詞によって許容度が異なることが説明できない。Tsujiura (2003)は、日本語の語彙的使役動詞は限界性に関して未指定であると述べる。しかし、先ほど述べたとおり、多くの日本語話者において accomplishment verb は結果を含意(entail)するから、この説は妥当ではない。Sato (2005: 99-113)のメトニミー説と Ezure (2006)の焦点化操作(focusing operation)説は、上で述べた「結果の defocusing」と関連するが、これだけでは、(25)の表に示した、動詞によって容認度が異なるという Miyajima (1985)の調査結果を説明できない。Aoki and Nakatani (2012, 2013)はプロセス成分の強さ(strength of the process component)によって説明しようとする。これは言い換えれば accomplishment における動作部分の強さによって説明する試みであるが、4.4 節で論じたように、結果否定の容認可能性の問題は、むしろ、結果の部分に注目して説明すべきであると思われる。

先行研究の多くは、日本語の結果否定の容認可能性を一つの観点だけから説明しようとした。しかし、(i)は結果部分の意味にかかわる要因であり、逆に、(ii)はその結果部分そのものを目立たなくさせるものなので、これらを一つにまとめることは不可能だろう。

### 5. 意図された結果

ビルマ語の accomplishment verb が表す結果は、常に否定することが可能であ

る。このことから、ビルマ語には *accomplishment verb* が存在しないとする考え方が出てくるかもしれない。*accomplishment verb* に見えるものは *activity verb* なのではないかという考え方である。しかし、筆者は、ビルマ語には *accomplishment verb* が存在すると考える。なぜなら第一に、ビルマ語においても、次の(28)のような文で、もし後に、結果を否定する文が現れなければ、「彼は死んだ」と解釈される。

- (28)      $\text{t}^{\text{u}}=\text{g}\text{o}$      $\text{t}^{\text{a}}=\text{t}\text{e}$ .  
           3sg=KO kill=REAL  
           ‘(I) killed him.’

また第二に、*accomplishment verb* を認めなければ、(29)が適格であるのに対してなぜ(30)は容認度が低いのかを説明することができない。

- (29)      $\text{t}^{\text{a}}=\text{p}^{\text{h}}\text{o}$      $\text{t}\text{a}\text{n}\text{a}\text{y}\text{i}$      $\text{c}\text{a}=\text{d}\text{e}$ .  
           kill=to    one.hour last=REAL  
           ‘It took one hour to kill (him).’

- (30)      $\text{?p}^{\text{y}}\text{e}=\text{b}\text{o}$      $\text{t}\text{a}\text{n}\text{a}\text{y}\text{i}$      $\text{c}\text{a}=\text{d}\text{e}$ .  
           run=to    one.hour last=REAL  
           Literal translation: ‘It took one hour to run.’

動詞  $\text{t}^{\text{a}}$  ‘kill’が *accomplishment verb* であるのに対して、 $\text{p}^{\text{y}}\text{e}$  ‘run’が *activity verb* であることが、(29)と(30)の許容度の差を生じる原因であると思われる。したがって、ビルマ語には *accomplishment verb* が存在し、その語彙意味構造の中には結果を表す部分が含まれていると考えなければならない。

では、ビルマ語の *accomplishment verb* における結果否定が可能なことは、どのように説明するべきだろうか。筆者は、ビルマ語の *accomplishment verb* において、結果は「動作者によって意図(intended)されたもの」として、意味構造の中に組み込まれていると考える。結果はあくまでも動作者が意図したものであり、それは動作者の心の中にあるものだから、否定が可能なのである。

そして、(28)で、後続する否定文がなければ「彼は死んだ」という解釈になるのは、語用論的に生じる意味であろう。これが意味論ではなく語用論の問題で



あると考える理由を以下に述べる。

ビルマ語では、使役動作の結果を明示するために、subordinate clause marker の *=ʔàun* ‘until; so as to’ を用いて次のような文をよく使う。

- (31) *t̥ú=gò t̥è=ʔàun t̥aʔ=tè.*  
3sg=KO die=until kill=REAL  
Literal translation: ‘(I) killed him until (he) died.’  
Free translation: ‘(I) killed him.’

- (32) *câ=ʔàun châ=dè.*  
drop(vi)=until drop(vt)=REAL  
Literal translation: ‘(I) dropped (it) until (it) dropped.’  
Free translation: ‘(I) dropped (it).’

- (33) *pyeʔ=ʔàun phyeʔ=tè.*  
break(vi)=until break(vt)=REAL  
Literal translation: ‘(I) broke (it) so that (it) broke.’  
Free translation: ‘(I) broke (it).’

これらは少々奇妙に見えるかもしれない。(31)を例にとると、動作主は「死ぬ」という結果を想定して動作を行っているはずだから、「死ぬまで」を表す従属節を用いる必要はないように思えるのである。つまり、この文は tautology に見えるのである。しかし、ビルマ語においてこの表現は自然である。

重要なことは、(31)から(33)のような文は、(34)に示すように、結果を否定すると容認度が下がるということである。

- (34) *\*t̥ú=gò t̥è=ʔàun t̥aʔ=tè. dà=bèmê mǎ-t̥è=bú.*  
3sg=KO die=until kill=REAL this=though NEG-die=NEG  
Literal translation: ‘(I) killed him until (he) died. But (he) didn't die.’

つまり、*=ʔàun* によって作られた従属節によって、結果が entail されるのである。このことは、この従属節が、intended result が実際に実現したことを表すために使われていることの証左になる。ビルマ語の accomplishment verb が意味論的に

結果を entail しないから、結果が生じたことを明示したいとき、 $=\text{?}aun$  によって作られた従属節を用いるのだろう。ビルマ語で、もし *accomplishment verb* が意味論的に結果を entail するのであれば、このような表現は必要がないと思われる。

Tai (1984: 291)は、中国語の *shā-sǐ* (kill-die) ‘kill’ のような *resultative expression* における *resultative complement* (この例では *sǐ* ‘die’)が結果の実現を表す機能を持つことを指摘している。ビルマ語には、*shā-sǐ* のように「他動詞+自動詞」からなる、使役的意味を持つ動詞連続は存在しない。なぜなら、Sawada (1988)が指摘したように、ビルマ語の動詞連続においては主語項が同一でなければならぬからである。したがって、次の例文は非文である(ビルマ語の動詞連続の一般的特徴については Vittrant 2006 を見よ)。

- (35)      \* $\text{t}u=go$        $\text{ta?}$        $\text{te}=de$ .  
              3sg=KO      kill      die=REAL  
              Intended meaning: ‘(I) killed him.’

(31)から(33)における  $=\text{?}aun$  によって作られた従属節は、結果を entail するという意味で、中国語の *resultative complement* と同様の機能を有していると言うことができる。両言語は、実現した結果を明示するために、別々の方法を用いているのである。

ここで、Tsujiura (2003)の日本語についての説を思い出そう。Tsujiura は、日本語の語彙的使役動詞(*lexical causative verbs*)は限界性(*telicity*)に関して未指定(*underspecified*)であり、限界的な解釈(*telic interpretation*)は会話の推意(*conversational implicature*)から生じると考える。この説明は、日本語ではなく、むしろ、ビルマ語に当てはまると考えられる。4.3 節で述べたように、多くの日本語話者において *accomplishment verb* は結果を含意(*entail*)するのだから、*telicity* が *underspecified* であるとは考えにくい。

## 6. 結論

ビルマ語は、*accomplishment verb* における結果の否定が完璧に容認される言語である。結果の否定を容認しない話者はいないと言ってよい。一方、日本語話者にはそれを容認しない者も多く、その点で日本語はビルマ語と大きく異なる。

ビルマ語では、**accomplishment verb**の結果は **entail** されないので、結果の否定が容認される。ビルマ語で結果が **entail** されないのは、動詞が表す結果は動作者によって **intend** されたものだからである。

一方、日本語では、**accomplishment verb**における結果は基本的には **entail** されると考えるべきである。だからこそ、結果の否定を容認しない話者が少なくなると考えられる。しかし、一定の要因により、結果の否定の容認度が高くなることがある。それは、(i)結果の不完全な生起という解釈、および、(ii)副詞的要素による結果の **defocusing**, の2つである。このうち、(i)が主要な要因である。英語においても、日本語と同様に **accomplishment verb**における結果は **entail** されるが、英語には(i)(ii)のような条件が存在しない。

なお、ビルマ語の **accomplishment verb** の **intended result** を意味構造の中でどのように表示するかという問題は、様々な言語理論の研究者に委ねたい。

最後に、他の言語について述べておきたい。上で見てきた結果否定が容認される現象は、ビルマ語と日本語以外でも、中国語(Tai 1984), ヒンディー語 (Singh1991), タミール語(Talmy 1991), Mon 語(Jenny 2005)などで報告されている。Kato (1996)の観察によると、ビルマ語に隣接する言語であるポー・カレン語(Pwo Karen)においても、(36)のように、結果の否定が可能である。

- (36)     *jə mə θi ʔəwé. lānānθi θi ʔé.*  
1sg CAUS die 3sg but die not  
'I killed him. But he didn't die.'

Phan Thi My Loan (p.c.)によれば、ベトナム語においても、(37)のように結果の否定が可能である。

- (37)     *Tôi đã giết nó. Nhưng nó chưa chết.*  
1sg PST kill 3sg but 3sg not.yet die  
'I killed him. But he hasn't died.'

一方、Marasri Miyamoto (p.c.)によると、タイ語では次のように、結果の否定が不可能である。

- (38) \**phǒm khâa kháw. tɛ́e kháw mây taay.*  
 1sg kill 3sg but 3sg not die  
 Intended meaning: ‘I killed him. But he didn’t die.’

しかし、Thepkanjana and Uehara (2009: 605; 2010: 299)は、タイ語においても動詞連続の中では次のように結果の否定が可能であることを指摘している<sup>4</sup>。

- (39) *tamrùat khâa phûuráay mây taay.*  
 police kill criminal not die  
 ‘The police tried to kill the criminal but he/she was not dead.’

こうして見ると、accomplishment verb において結果の否定が可能な現象は、東アジア、東南アジア、南アジアに広く分布しているようである。したがって、この現象は一種の地域特徴である可能性があることを指摘したい。ただし、本章で指摘したとおり、結果の否定が表す状況は言語によって異なる。単にこの現象が存在するかどうかだけではなく、意味的な違いにも注目する必要があることを強調したい。

### Acknowledgments

This chapter was translated from Japanese by John Haig. I thank U Shwe Pyi Soe, Daw Htet Htet, and Ma Thu Thu Nwe Aye who helped me as native speakers of Burmese by judging the acceptability of Burmese sentences. Thanks are also due to the two editors of this volume as well as to an anonymous reviewer for helpful comments to improve the draft.

### Abbreviations

KA - the case particle =*kâ*/=*gâ* ‘agent (subject); source’; KO - the case particle =*kò*/=*gò* ‘patient; theme; recipient; goal’; LO - the subordinate clause marker =*lô*; PI - the particle =*pì*/=*bì* indicating a perfect-like meaning; PN - personal name; vi - intransitive verb; vt - transitive verb; 1sg - first person singular; 3sg - third person singular

## Notes

1. With many of the Burmese particles that begin with a voiceless consonant, the first consonant (aside from consonants that follow a glottal stop) is replaced by its voiced counterpart. Particles =*kâ*/=*gâ* and =*kò*/=*gò* are such examples. In this chapter, whenever such particles are cited, both voiceless and voice forms are shown before and after slashes respectively.
2. In Burmese, when the main clause verb is negated, the verb will be prefixed with *mǎ-* and be followed by the clitic =*phú*/=*bú*.
3. Alam Sasaki (2001)は、*moyasite mo moenakatta* のような、“-*te mo ... -nakatta*” という表現を含む文を使って、結果の *negatability* を議論している。屈折接尾辞 *-te* (いわゆる *conjunctive form*)は必ずしも事象の終了(*completeness*)を意味しないから、結果の *negatability* の検証において“-*te mo ... -nakatta*” を使うべきではない。
4. Marasri Miyamoto [p.c.]によれば、(39)の文はあまり良くないという。容認度に個人差がありそうである。

## References

- Alam Sasaki, Yukiko. 2001. “Moyashita keredo moenakatta” no wa naze?: “yowai tasseidooshi” to “tsuyoi” tasseidooshi. In Masahiko Minami and Yukiko ALAM Sasaki (eds.) *Gengogaku to Nihongokyoiku II*. 57-74. Tokyo: Kuroshio.
- Aoki, Natsuno and Kentaro Nakatani. 2013a. Process, telicity, and event cancellability in Japanese: a questionnaire study. *Papers from the Thirtieth Conference November 10-11, 2012 and from the Fifth International Spring Forum April 21-22, 2012 of the English Linguistic Society of Japan*. 257-263.
- Aoki, Natsuno and Kentaro Nakatani. 2013b. Jishoo kyanseru kanoosei ni tsuite no shitsumonshi choosa: sono shoosai deeta [A questionnaire study on event cancellability: it's data in detail]. *Konandaigaku Kiyoo Bungakuhen* (The Journal of Konan University: Faculty of Letters) 163. 41-57.
- Cornyn W. S. and R. I. McDavid, Jr. 1943. Causatives in Burmese. *Studies in Linguistics* 1.18. 1-6.
- Ezure, Kazuaki. 2006. “Moyashitemo moenakatta”: jishoo mukooka ni kansuru nichieigo taishookenkyyuu [A comparative study of event cancellation in English and Japanese]. *Kanagawakenritsu Gaigotankidaigaku Kiyoo Soogooen* (Bulletin of Kanagawa Prefectural College of Foreign Studies) 29. 23-36.

- Hay, Jennifer, Christopher Kennedy and Beth Levin. 1999. Scalar structure underlies telicity in “degree achievements”. In T. Mathews and D. Strolovitch (eds.) *SALT 9*. 127-144. Ithaca: CLC Publications.
- Hayatsu, Emiko. 1989. Yuutsui tadooshi to mutsui tadooshi no chigai ni tsuite: imiteki na tokuchoo o chuushin ni [On the semantic difference between paired and unpaired transitive verbs in Japanese]. *Gengo Kenkyu* (Journal of the Linguistic Society of Japan) 95. 231-256.
- Ikegami, Yoshihiko. 1981. “Suru” to “Naru” no Gengogaku: Gengo to Bunka no Taiporojī e no Shiron. Tokyo: Taishukan Shoten.
- Ikegami, Yoshihiko. 1985. ‘Activity’ - ‘accomplishment’ - ‘achievement’ – A language that can’t say ‘I burned it, but it didn’t burn’ and one that can. In Adam Makkai and Alan K. Melby (eds.) *Linguistics and Philosophy. Essays in Honor of Rulon S. Wells*. 265-304. Amsterdam: John Benjamins.
- Jenny, Mathias. 2005. *The Verb System of Mon*. Zurich: Arbeiten des Seminars für Allgemeine Sprachwissenschaft.
- Kageyama, Taro. 1996. *Dōshi Imiron: gengo to ninchi no setten*. Tokyo: Kuroshio.
- Kageyama, Taro and Wesley M. Jacobsen (eds.). 2017. *Transitivity and valency alternations: Studies on Japanese and beyond*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Kato, Atsuhiko. 1996. Pōkarengo (tōbu hōgen) no dōshirenzoku ni okeru shudōshi ni tsuite [On head verbs of serial verb constructions in Pwo Karen]. *Gengo Kenkyu* (Journal of the Linguistic Society of Japan) 113. 31-61.
- Kato, Atsuhiko. 2010. Birumago no ‘ue’ o arawasu meishi no kōchishiteki yōhō ni tsuite [On the postposition-like usage of a Burmese noun that means ‘on’]. *Journal of the Research Institute for World Languages, Osaka University* 4. 31-54.
- Kato, Atsuhiko. 2015. Birumago no jishōkyanseru [Event cancellation in Burmese]. *Ex Oriente* 22. 1-36.
- Kennedy, Christopher and Louise McNally. 1999. From event structure to scale structure: degree modification in deverbal adjectives. In T. Mathews and D. Strolovitch (eds.) *SALT 9*. 163-180. Ithaca: CLC Publications.
- Kennedy, Christopher and Luise McNally. 2005. Scale structure, degree modification, and the semantics of gradable predicates. *Language* 81.2. 345-381.
- Liu, Ch'i-wen. 2006. *Chūgokugo no Asupekuto to Modaritī*. Osaka: Osakadaigaku Shuppan.

- Miyajima, Tatsuo. 1985. “Doa o aketa ga, akanakatta”: dōshi no imi ni okeru <kekkaei>. *Keiryō Kokugogaku* (Mathematical Linguistics) 14.8. 335-353.
- Okell, John. 1969. *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*. London: Oxford University Press.
- Sato, Takuzo. 2005. *Jidōshibun to Tadōshibun no Imiron*. Tokyo: Kasama Shoin.
- Sawada, Hideo. 1988. Gendai Birumago ni okeru dōshiharetsu no ruikai ni tsuite. *Gengogaku Kenkyū* 7. 73-110.
- Singh, Mona. 1991. The perfective paradox: or how to eat your cake and have it too. *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. 469-479.
- Tai, James H-Y. 1984. Verbs and times in Chinese: Vendler’s four categories. *Papers from the Parasession on Lexical Semantics, Chicago Linguistic Society*. 289-296.
- Talmy, Leonard. 1991. Path to realization: a typology of event conflation. *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. 480-519.
- Thepkanjana, Kingkarn and Satoshi Uehara. 2009. Resultative constructions with “implied-result” and “entailed-result” verbs in Thai and English: a contrastive study. *Linguistics* 47.3. 589-618.
- Thepkanjana, Kingkarn and Satoshi Uehara. 2010. Syntactic and semantic discrepancies among the verbs for ‘kill’ in English, Chinese and Thai. *PACLIC 24 Proceedings*. 291-300.
- Thin Aye Aye Ko. 2002. *Gendai Kōgo Birumago ni okeru Goikōzō to Imitokuchō: Birumago to Nihongo no Taishō no Kantan kara*. Kobe: Kobe University dissertation.
- Tsujimura, Natsuko. 2001. Degree words and scalar structure in Japanese. *Lingua* 111. 29-52.
- Tsujimura, Natsuko. 2003. Event cancellation and Telicity. In William McClure (ed.), *Japanese/Korean Linguistics, Volume 12*, 388-399. Stanford: CSLI Publications.
- Vendler. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Vittrant. 2006. Les constructions des verbes en série: Une autre approche du syntagme verbal en birman. *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 101.1. 305-368.